

進化し続ける北海道の フットパスと日本各地に 広まっていくフットパスの輪



小川 浩一郎 (おがわ こういちろう)

(株)ジオ (THE-O) 代表取締役

1980年札幌市生まれ。2001年エコ・ネットワーク代表代行、13年北海道科学大学客員准教授。札幌市南区常盤で育つ。『フットパス』をキーワードに市内、道内、国内で普及活動、ウォークイベントを実施し、ワールドウォーカーとして世界の「フットパス」を歩いている。「歩く」ことを通じて自然あふれる都市・札幌を観光客へ伝えるべく奮闘中。著書に「北海道フットパスガイド①」「北海道フットパスガイド②」。

フットパス・ネットワーク北海道 (FNH)

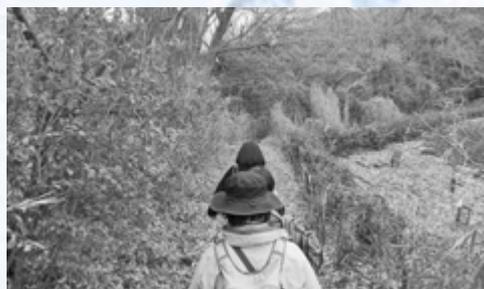
フットパスの連載も2017年8月号から10回目となりました。今までは北海道の中でもフットパス・ネットワーク北海道 (FNH) 加盟地が中心の紹介でした。FNHは2002年に道内でフットパスに携わっている団体や個人、地域の代表者とともに北海道内のフットパスの機運が高まっているのを受け、「全道フットパス・ネットワーク準備会」として立ち上がったのが始まりです。フットパスの普及・促進、情報提供、コースサインの統一化、カンントリーコード (フットパスを歩く上でのルール) の制定などを進めていくということで、横のつながりを重視した団体でしたが、2012年3月に発展的に現在の名称に変更し、さらに1年に1回幹事会を行い、加盟地同士で情報共有やフットパスの未来に向けての話し合いを行い、全道フットパスの集いも開催しています。18の団体と1名の個人が名を連ねていて (2019年11月現在)、2019年10月にはニセコフットパス協会の会長がFNH新会長に就任しました。

「歩くことを楽しめる」「歩く文化」を定着

北海道では2016年5月号でエコ・ネットワーク代表小川巖が記載したものからさらに増え、約50の市町村に200ほどのフットパスがあります。エコ・ネットワークではフットパス活動の始まりも早く、1990年代前半からスタートし、四半世紀ほどが経ったこととなります。国内では北海道新得町と東京都町田市が最も古く、同じく1990年代前半からフットパスを整備し始めています。その後、道内では2000年代前半から後半にかけて爆発的に広がり、現在のコース数になったという訳です。登山以外にも気軽に歩くことを楽しみたい、健康目的、自然体験などウォーカーによって目的は異なりますが、私たちが行ってきた活動は「歩くことを楽しめる」人口を増やすことと「歩く文化」を定着させることでした。

東京都町田市とフットパスのきっかけ

それでは北海道外ではどうなのでしょう。前述のとおり、東京都町田市は1990年代前半からフットパスを整備



東京都内に残った自然の中のフットパス (東京都町田市)



し始めて、現在は日本フットパス協会の本部も置かれており、日本のフットパスをけん引しています。今年で10周年を迎える同協会では来年2月に記念式典を開催する他、記念冊子として、全国のフットパスをまとめたものを発表することになっています。ジブリ映画の「平成狸合戦ぽんぽこ」にあるように、当時、町田市周辺でも開発ブームが起き、自然が残っていた同地域の特に多摩丘陵の尾根などの部分に乱開発の手が伸びてきました。その時に点として各所の自然を残すのではなく、線や面として残そうという取り組みが行われるようになってきました。これが町田市のフットパスの始まりといわれています。この線や面がフットパスということです。このフットパスを利用し、野外活動や地域との交流なども行い、新旧の住民たちの心をつなぐことにも成功したそうです。現在では近隣の市町村も含めて40近いコースが整備されていて、フットパスをツールに様々な活動が行われています。

九州ではおもてなしが人気の要因

北海道とは真逆の九州では15年前の北海道のように爆発的にフットパスが広がっています。熊本県美里町が九州フットパスの始まりで同町を中心に九州全県に広がりました。2011年開始とそれほど古くはありませんが、来年までの10年間に日本フットパス協会の年に1回の全国大会が3回も九州で行われています（2020年度大分県臼杵市も含めて）。交流人口の増加や地域間交流を大きな柱に掲げていて、地域の住民たちのおもてなしが人気の要因のひとつになっています。またフットパス以外にも九州オルレ（韓国版フットパス）や九州自然歩道など歩くツールが多くあり、つながりを持つことで益々発展しています。さらに熊本県では県庁が主体となり、歩く人たちを歓迎する「Walkers are Welcome (WaW)」活動も始まりました。フットパスのみならず歩きに來る人たちを地域が歓迎しようという英国発祥の試みです。日本と英国のWaW同士での交流も盛んになりつつあり、昨年は英国のWaW会長ほか幹部が北海道から九州まで講演をして回りました。今年5月

と10月には日本から英国のWaWタウンを訪問しています。

国内でフットパス活動を行っている地域は他にも多くありますが、首都圏や北の北海道、南の九州など全国各地でフットパスの輪が広まってきています。

進化し続ける北海道のフットパス

それでは北海道に戻ってみましょう。連載が続いている間にも紹介してきたフットパス地域は進化し続けています。札幌市では「さっぽろ周回ウォークウェイ」をオフィシャルなものとしようという動きが出てきて、現在、私たちの構想したルートを北海道大学や札幌市、札幌観光協会、市内のフットパス関係者も集まり、研究会が立ち上がりました。今後数年を目途にオフィシャル化が進んでいくことでしょう。

黒松内町、ニセコ町はロングパス（長距離フットパス）化が実現し、「ニセコアラウンドロングパス」という名称となりました。上富良野町は2020年に前述のWaW会長をお呼びし、フットパスも含めた歩く活動とその可能性を追求する大きなシンポジウムが予定されています。南幌町では千歳川遊水地の完成を控え、食と農に加え遊水地を活用したフットパスに進化するようです。

「歩く」以外にも可能性を秘めたフットパス

現在、日本でのウォーキング人口は20年前よりも大幅に増え、3倍近くの3,376万人になっています（引用元：笹川スポーツ財団）。健康目的から徐々にライフスタイルとしての目的に変わってきているのも注目すべき点です。歩く文化が着々と広まり、愛好家たちの受け皿も増えてきていて、フットパスは「歩く」以外にもそれを活用したツールとしても存分に能力を発揮できる可能性を秘めています。フットパスを使った、自然観察、歴史散策、食の体験、地域との交流、自分探しなどツールとして利用できるものはまだまだ広がります。フットパスや歩く道を利用して、道内はもとより日本全国を回れる日が来る日もそう遠くはないかも知れません。



さっぽろ周回ウォークウェイの実踏調査（札幌市）



WaWメンバーと日本人が交流しながら英国のフットパスを歩く（英国オットリー）